

『増補版 子どもと貧困』

写真は朝日新聞取材班による 2018 年 7 月刊行の朝日文庫。表紙帯には、「パンを万引きする 3 歳児、親にバイト代を搾取される高校生入学願書を母親に破られる中学生……子どもの 7 人に 1 人が貧困」と。読んでいて、こころに突き刺さる。ここでは「エピソード」だけ、抜粋して紹介したい。



取材班で最初に確認し合ったことがある。

仮に親が、大人としての責任を果たしていないように見えても、その親のもとに生まれ育つ子どもには、なんの責任も罪もない、ということだ。その環境ゆえに困難を背負い込んだ子どもに、「それは自己責任だ」と言えるだろうか。そしてその親もまた、子どもだった時代がある。自己責任で片付けたつもりになっても、解決へのヒントは何も生まれないように思えた。子どもの持つ無限の可能性を、その育ちゆえに閉ざされることは、子ども自身にとっても、社会にとっても大きな損失だ。そのために社会ができることは何か、一つずつ考えていかななくてはならない。

取材を進めてみて、強く感じたのは、現代の子どもの貧困には、実に多くの問題が含まれている、ということだ。労働における女性の位置、賃金体系のあり方、長時間労働、子育て中の女性の働きにくさなどは、シングルマザーの貧困に直結している。それは女性だけの問題でなく、非正規雇用が増え、男性だって大変だ。また、障害や虐待などがからむケースも目についた。

離婚後の子育てを母親が担うケースが多いことや、離婚した後の養育費が払われないケースが 8 割を占める現状などからは、日本の家族観や男女観の影響も感じた。ひとりの子どもの養育に、最低限必要な費用を誰がどう保障すべきなのか、の議論が置き去りになってきたように思う。

行政の予算は無尽蔵にない。その中で、誰が何を担うべきか、公的資金はどこに手厚くすべきか、民間や個人ができる支援はどんなものか。本当の意味で自己責任が問われる部分はどこか。細かく見直していかななくてはならない。

自己責任論が飛び交う背景には、「自分だって大変なのに、誰もわかってくれない」という気持ちもあるのではないかと感じた。貧困は今や、解決しなければならない「課題」として認識されたが、たとえ貧困でなかったとしても、社会にはさまざまな困難や生きにくさを抱えている人がいる。自己責任論は、「こっちの問題にも注目してくれ」「置き去りにしないで」という叫びのようにも思えた。

そうした問題の一つずつ目を向け、対症療法だけでなく、問題の芽を減らしていく努力がますます求められている。ひとりでも多くの人に関心を持って動くことが、問題を少しずつでも解決に導く、遠くて近い道なのだろう。

(2018 年 10 月 13 日)